



赤い羽根共同(ドラえもん)募金 25,425 円集まりました

先日、” Home & School ”でもお知らせしましたが、10月11日(月)～15日(金)、赤い羽根共同(ドラえもん)募金を行いました。合計金額は25,425円になりました。ご協力ありがとうございました。

赤い羽根共同(ドラえもん)募金は、子ども、高齢者、障がい者などを支援する福祉活動や、自然災害が起こったときの支援活動など、さまざまな民間の地域福祉活動を支援することを目的として、10月1日から都道府県単位で行われています。その使いみちや目標額を事前に決めてから寄付を募る「計画募金」です。

一人の力は小さいかもしれませんが、それが10人、100人、1,000人、10,000人・・・と集まってくると、私たちが思っているよりもはるかに大きな力になっていきます。世の中を動かすような大きな出来事も、一人の小さな気持ちと行動から始まります。

地獄と極楽の違い



うどんを食べると必ず思い出してしまう話があります。京セラや第二電電(KDDI)の創業者の稲盛和夫という人が、偉いお坊さんから聞いたという話で、「人生の王道」という本の中で紹介されています。「雲水(うんすい)」とは、場所を決めないで、いろいろな所で修行するお坊さんです。「老師」とは、高齢で、お坊さんにいろいろ教える、先生のような人です。

むかし、若い雲水がある老師に、「地獄、極楽というのは本当にあるのでしょうか」と尋ねたというのです。禅宗というのは、来世のことについてほとんど教えないからでしょう。老師はすかさず、「うん、確かにある。」と答えます。

雲水が、「どんなところなのですか。地獄と極楽というのは」と聞きます。

すると、ご老師は静かに語り始めたそうです。実は、地獄も極楽もちっとも変わらない。少し見ただけでは同じような場所なのだ。けれども、そこに住む人たちの心がまったく違う。

たとえば、おいしい釜揚げうどんが地獄にも、極楽にもある。それぞれ大きな釜があって、お湯がぐつぐつ煮立っている。うどんを湯がいているその大きな鍋の周りを、腹をすかした者たちが10人も20人も取り巻いている。手にはつけ汁のお椀と1メートルもある長い箸を持っている。ここから先が地獄と極楽ではまったく違うのだ。

地獄では、みんなが我先に争って箸を突っ込む。何とか、うどんをつかむことができるのだけれども、箸が1メートルもあるものだから手元のつけ汁のお椀にまで持ってくる事ができないし、当然食べることもできない。そうこうするうちに、向こう側にいる者が箸の先に引っ掛かっているうどんを横取りしようとするので、「それは俺のもんだぞ、食うな」と怒り、相手の箸で叩き、突く。すると、「何を、この野郎」と相手も突き返してくる。そんなことがそこらじゅうで始まって、うどんは鍋から飛び散ってしまっ、誰も一本も食べられずに、殴り合いのけんかが始まってしまい、阿鼻叫喚(あびきょうかん)*の絵図と化してしまう、それが地獄なのである。

※ 阿鼻叫喚・・・悲惨な状況になり、混乱して泣き叫ぶこと

では、極楽というのはどうなっているのか。極楽にいる者は皆、利他の心、他人を思いやる美しい心を持っている。1メートルの箸でうどんをつかんだら、釜の向こう側の人のつけ汁につけて、「さあ、あなたから先にどうぞ」といって食べさせてあげる。すると、今度は向こう側の人と同じように自分に食べさせようとしてくれる。1本たりともうどんを無駄にすることなく、みんながおなかいっぱい食べられる。つまり、地獄と極楽は確かにあるが、それは人の心の在り様がそれらを作り出すのだよと、ご老師は若い雲水に聞かせたというのです。

実際に、いくら経済的に豊かであっても、もっと儲けたいと欲望を際限なく募らせていては、心が満たさせることはなく、決して幸福になれないでしょう。一方、裕福ではなくとも、やさしい思いやりの心をもって、希望に満ちて生きている人たちは幸福を感じることができるはず。やはり人生は、その心の持ち方次第で、地獄にも極楽にもなるのです。